

分科会3「身近に迫る危機への備え」レポート

「ネットワークの重要性の再認識」

藤沢市生涯学習部郷土歴史課 藤澤浮世絵館担当 主任 益田 亮助

1. はじめに

第68回全国博物館大会では、最終的なまとめのフォーラム「博物館を取り巻く課題と展望」において、キーワードとして「ネットワーク」の重要性が参加の各館で確認されました。今回の大会での研修は、3つの分科会、1「コロナ禍の下での博物館の取組」、2「コロナ時代の新しい博物館像」、3「身近に迫る危機への備え」で構成されていました。テーマは違えども、天災、コロナ禍、またそれに続く経済の不況のゆくえなど、これからの博物館運営をとりまく危機感が、各分科会で共通認識のもとで語られ、今後の変革していく社会の中で博物館の有用性をどのように発信していくかという課題について、各館が共有している取り組みから「ネットワーク」の重要性が導き出されたものでした。この導き出された「ネットワーク」は、集約された広義であり、ネットワークを表すものは、団体や各館の組織力また、インターネット、AIの活用によるつながりも含まれる様々なカタチでした。

私は、分科会3を研修しました。特に身近にある施設であり実際に水害により被災された、川崎市市民ミュージアムの体験や、横浜港を間近とし、浸水ハザード地域にある神奈川県立歴史博物館の浸水災害対策について情報を得ることが目的でした。そして災害を視点とした、東京文化財研究所の保存学、国立歴史民俗博物館の東日本大震災後の文化財の保護の活動について現在の業務で活用できる知識を得る機会となればとの思いがありました。

2. 分科会3『身近に迫る危機への備え』講義概要

(1)「博物館における災害への対応－収蔵庫を中心に－」

講師：東京文化財研究所 保存科学研究センター
秋山純子 氏

秋山氏は、博物館の文化財が集中する場所である収蔵庫を中心に、災害に備えた対応策の重要性について講義されました。結論としては、現在の

周辺環境や館の減災機能だけでなく、その地域の過去の災害について調査し、博物館の建物の構造を把握し災害に対する予測能力の蓄積でした。収蔵庫の整理整頓は常に行い、文化財、資料の状態を熟知しておくことが災害対策の前提であることが明示されました。

秋山氏は、災害は、いつ起こるかは判らない実例として、昨年度まで勤めた九州国立博物館での経験を紹介されました。九州国立博物館は、海岸からも距離がある高台であり、過去に大きな災害記録はなかったそうです。また、免震機能についても十分な施設であり、熊本の震災の際も影響はなかったとの前置きから転じ、2018年の大雨では、収蔵庫、展示室でなく、多目的に使用している部屋が軽微ではあるが浸水被害にあったことについて報告されました。

(2)「川崎市市民ミュージアム被災収蔵品レスキューの現況について」

講師：川崎市市民ミュージアム 佐藤美子 氏

2019年10月の多摩川氾濫による水害にあられた経緯と現況についての報告がありました。佐藤氏は館の災害を目の当たりにし、川崎市市民ミュージアム単独で対応していくことの難しさを看過され、他機関への連絡という行動に思考の舵をきりました。この行動は、今回の博物館大会でのキーワードである「ネットワーク」の重要性についての例だと思います。その後、各機関が川崎市市民ミュージアムの復旧に協力され、現在、川崎市市民ミュージアムは、独立行政法人国立文化財機構など10団体が参画する文化遺産防災ネットワーク推進会議、神奈川県博物館協会など5団体の計15団体の支援をうけて、保存、修復の作業にあたられています。さらに現在では、90近くの法人、大学、民営業者、個人、ボランティアなどが、資材提供、専門知識などの助言などがあり協力の輪が広がっており、ネットワークが機能する姿を見せています。

(3)「災害対策としての資料保存－現状と課題・展望－」

講師：国立歴史民俗博物館 天野真志 氏

阪神・淡路大震災、東日本大震災後の文化財の保護、修復、災害対策について、天野氏は、ネットワークの重要性を基軸に、文化財防災センターの発足の意義とこれからの展望と「資料ネット」の構築の重要性を報告されました。それは、文化財、資料の救済、保存、継承に向けた方法論を整理・検討する場として、特定の分野や地域を超えた横断的な交流と連携の必要性を指します。

契機は、阪神大震災後、被災地それぞれの文化財の保存について、地域内でそれぞれに組織や、個人が情報を共有しながら活動されてきたことにあります。それ以降、文化財の保護についてネットワークの意義が意識されるようになり、さらに東日本大震災で被災した文化財、また文化財になり得る全ての「もの」についての保存、修復が課題となり、文化財、資料のレスキューはどこまで行えばよいのかという問題に直面し、現場での応急措置も修復にせまる必要性が表層化してきたことと捉えられていました。具体的には東日本大震災での文化財の被災状況は、年々、広範囲かつ多ジャンルにわたり現れ、数も増える現状があります。そのため、特定の組織では対応が不可能であり、それを補完していくのが、文化財防災センターおよび「資料ネット」の運用の役目であり契機として受け止めました。

(4)「来るべき危機に備える－リニューアルと災害対応－」

講師：碧南市藤井達吉現代美術館 安藤里恵 氏

来るべき南海トラフ大地震への備えについての、館施設のリニューアルについて報告がありました。来るべき災害についての視点は、講義1の内容を、地方の小規模館での状況に投影した場合としてもみることができます。

安藤氏は、美術館の建つ地域のハザードマップも含め、過去の災害などの詳細を把握され、またライフラインの被害による断絶時間なども想定されていました。館設備のリニューアルでは、来館者利便性の向上、展示設備とともに心臓部ともいえる収蔵室についての増設改良について災害の予測が重要であることを明示されました。今後の問題点としては、収蔵品のスペースの飽和化を見据

えた緊急時の文化財の受け入れや収蔵品の移動についてあげられました。

(5)「収蔵庫の浸水を想定した資料搬出訓練の実践と課題」

神奈川県立歴史博物館 武田周一郎 氏

神奈川県立歴史博物館からは、緊急事態として、火災及び浸水を想定した資料の搬出訓練の実施報告がありました。特に、横浜港の至近であり、かつ収蔵庫が地下であることから浸水被害が喫緊の課題として捉えられていました。その課題を明確にするために行われたのが、訓練の目的でした。ここで武田氏は、まず行ってみることの重要性をあげられました。先に計画上の解決を目指すよりも行動で見えてくる問題点を整理するための実施には、説得力がありました。また喫緊の事態を想定し、国、県指定文化財を最優先に搬出するなど、保護にあたる資料の優先順位をつけることは、全ての資料を平等にあつかう平時の姿勢とは異なる状況を予測されており、参考になりました。地下の収蔵室から2階の展示室に40分～50分で、44件の資料の移動の実績については、課題として、エレベーターが動かない場合はどのように行うのかなども、まずは実践から得られたもので、今後の計画への効果は大きいと報告されました。

以上、分科会での5つの講義の内容についての概略を紹介しました。私なりにそれぞれの講義の内容を、講義名の下段に要約しました。これをいかにして、現在自らの職場に活かしていくのが今後の実践と課題となると考え、少しずつ行動に移し始めました。

- 1、「博物館における災害への対応－収蔵庫を中心に－」
 - ・文化財を取り巻く環境と施設の把握
- 2、「川崎市市民ミュージアム被災収蔵品レスキューの現況について」
 - ・文化財被災の教訓
- 3、「災害対策としての資料保存－現状と課題・展望－」
 - ・過去から未来への文化財保護の展望
- 4、「来るべき危機に備える－リニューアルと災害対応－」

- ・ 未来の災害にむけたインフラの見直しと改正
- 5、「収蔵庫の浸水を想定した資料搬出訓練の実践と課題」
- ・ 実践と行動による課題の精査

3. 参加後の行動

私は、この大会で得た情報を活かすため、災害対策について環境の確認を行いました。まず、藤澤浮世絵館および、収蔵庫の施設と当該地区のハザードマップの確認を行いました。

複合ビルへの入居施設ですが、数字上の耐震基準からは、震度7での倒壊はないこと、また、水害、津波についても想定地域外であり即座に収蔵品が大きく被災することはないことは確認しました。またビル内の非常階段、排煙装置、消火栓の確認、消火器等は、ビル内の避難訓練等で年2回実施しています。資料整理については進行中ではありますが、今後は喫緊の事態に備え、資料の優先順位などを明確にし、専門職員が不在でも事態に対応できる体制づくりを進めることを計画します。

4. まとめ

私は、今回の講座に参加後、藤沢市が所蔵する

資料以外の文化財についても、強く思いを馳せるようになりました。災害は、市内全域に点在する文化財に平等に訪れる可能性があります。これは、全国のどの地域でも同じ課題だと思います。阪神・淡路大震災、東日本大震災、台風、水害などの教訓は文化財、資料を扱う業務において日々の情報収集の重要性が高いと改めて認識できました。被災を仮定すれば、藤沢市単独での遂行は難しいことは簡単に予測でき、やはりネットワークこそが援助となります。今後は、これまでに藤沢市が培った、他の行政や機関の文化財部署とのネットワークを基点に、災害からの保護を視点とした情報収集を目指したいと思います。また、藤澤浮世絵館は、開設から4年を過ぎたばかりの施設であり、神奈川県博物館協会のネットワークの中の連携も浅く、博物館大会で導き出された「ネットワーク」の広がりや深化は、重要な情報源となります。そしてネットワークを支えるものは、人と人のコミュニケーションです。内部連携、関係機関との情報交換、職員間の交流を積極的に図り、災害に備えるとともに文化財を未来につなぐ力を育てたいと思います。